

萬葉集卷十についてのノート

—あそびの精神—

中 川 幸 広

一

万葉集卷十はいうまでもなく、他の作者未詳歌とは大きく異なった特色を持つ。すなわちそれは、この巻が季節によって分類されていることである。万葉集において部類の基準として季節が使用されているのは卷八と卷十のみであるが、季節が、部類の基準とされたのは、単に編集の手段ではなく、一つの美学の誕生の故であろう。日本文学の古典を貫いて流れる抒情性のうち、自然に対する感情がその抒情の大部分を支えているのであって、それはまた初期万葉集の中に源流が見られ後期万葉に至って主流となっていくのである。したがって、それは、自然の美に対する発見ないし開眼、あるいは季節のうつろいに対する鋭敏な感受性の開発などに止まるのではなくて、文化の一つの定着、すなわち共通の感受性の定着にまでつながっていると考えるべきなのである。もっとも、これは編集者の美学にすぎないではないかという反論も当然ありうるのであるが、たとえば卷十の歌の内実が編集者の意図に十分に応え得たものである以上、編集者ひとりの恣意の問題ではなく一つの文化の定着と見るべきであろう。だからこそ季節による和歌集の編纂は、王朝和歌の勅撰集の四季の部立へと、ひとつの文化のパターン、感受性の基準としてまっすぐに受け継がれて行くのである。

この発見と内実を支えている精神、そこから生ずる眼ないしは視点がどこから来ているかを考えるというのが小論の意図である。またその視点が「あそび」という精神に支えられた新しい文学的態度でもあり、それに裏づけられて新しい文学が生じたのであろうというのが小論の提出したい仮説なのである。

ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』によると遊びの定義は次のようである。

要するに、形態という角度からすれば、遊びとは、フィクションである。日常生活の枠外にあると知りながら遊ぶ人を全面的に捕え得る自由な活動、いかなる物質的利益も、いかなる効用も持たず、明確に限定された時空の中で完了し、与えられたルールに従って整然と進行し、好んで自己を神秘で取り囲んだり、仮装によって日常の世界に対する自己の無縁を強調したりする集団関係を人生の中に出現させる。^{注①)}

もつとも、万葉集の歌の中で、「遊び」(名詞)・「遊ぶ」(動詞)という語を使う歌は四十語三十九首にすぎない。簡単に巻別の内訳を示せば左記のようである。(但し巻十三の二例は敬語である)

語	巻
1	2
2	3
2	4
8	5
5	6
2	7
2	8
3	9
2	10
2	13
1	15
3	17
3	18
4	19

計40

ちなみに、巻十では次の二首である。

春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶこの日は忘らえめやも(10・一八八〇)

白露を取らば消ぬべしいざ子ども露に競^まひて萩の遊せむ(10・二一七三)

前者の歌は「野遊」と題された一連(一八八〇—一八八三)の一首であり、「詠煙」(一八七九)「歎旧」(一八八四—一八八五)を「野遊」の一連に含めて考慮したとしても、「あそび・あそぶ」の語のみで、「あそび」の世界ないし精神をとらえるのはむずかしいのである。したがって、「あそび」は他の方法によってもとらえねばならない。

たとえば、巻五の同伴旅人を中心とした、「梅花の歌三十二首」「大伴淡等謹状・梧桐日本琴一面」、「松浦河に遊ぶ序」等の一連は、ホイジンガの「あそび」の定義に良くあてはまる。しかし、なんと言っても万葉集における典型的な風流の「あそび」は天平二年正月の梅花の歌三十二首の催しであろう。

この典雅華麗な催しを支えるさまざまな条件や精神はさまざまに論じられて来たし、これからも論じられるであろう。

うけれど、そのことの考察は一応おくとして、この梅花の歌三十二首の語彙を一つの網として、卷十の歌を掬い取るという方法を用いてみたい。

いうまでもなく、梅花の歌三十二首のもっとも中心的な語は「梅の花」であって、三十二首の全ての歌に含まれている語でもある。

梅の花は、集中一一七首、卷十では二十九首詠まれており、かなりの比重を占めているといっている。この梅についての考察は多くの人がされているので略すが、ただ次の二点だけは共通点として認識しておきたい。一点は時期的に言えば天平期の歌の素材であるということ、もう一点は、梅の花が漢詩的な趣向、表現による風雅・風流の意識の中で詠まれていることである。

もちろん、ほかにも多くの語があり、それらについて検討したい。
たとえば、風流の遊びに關係の深そうな、

春柳纏に折りし梅の花誰か浮べし酒杯の上に（5・八四〇）
の酒杯（佐加豆岐）

毎年とねねに春の来たらば斯くしこそ梅をかざして楽しく飲まめ（5・八三三）
の樂し・飲む等の語は、卷十にはあらわれて来ない。が、しかし、

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし（5・八二二）

梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも（5・八二四）

の散る・散らまく・惜し・折る（手折る）・かざす等の語は、卷十に（そして卷八にも）多く見られる点で、この卷をはかる語としての役割をある程度果すかと思われる。

春雨は甚いたくな降りそ桜花はまだ見なくに散らまく惜しも（10・一八七〇）

春されば散らまく惜しき梅の花暫しばしは咲かず含ふかみてもがも（10・一八七一）

手に取れば袖さへにはふ女郎花この白露に散らまく惜しも（10・二二二五）

卷八の「橘朝臣奈良麿の集宴を結ぶ十首」は、天平十年冬十月右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲したものであるが、

この十一首に詠まれた歌は、若い貴族の心情を歌って余すところがない。そしてまた今、あげた語もまたことごとく、この一連の歌の中に歌いこまれている。

手折らずに散りなば惜しとわが思ひし秋の黄葉をかざしつるかも(8・一五八一)
めずらしき人に見せむと黄葉を手折りそわが来し雨の降らくに(8・一五八二)

右二首 橘奈良摩

黄葉を散らす時雨に濡れて来て君が黄葉をかざしつるかも(8・一五八三)

右一首、久米女王

黄葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざしつ何か思はむ(8・一五八六)

右一首、泉犬養持男

奈良山をにほはす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば散るとも(8・一五八八)

右一首、三手代人名

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹とかざしつ後は散るとも(8・一五八九)

右一首、秦許遍磨

十月時雨に逢へる黄葉の吹かば散りなむ風のまにまに(8・一五九〇)

右一首、大伴池主

黄葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか(8・一五九一)

右一首、大伴家持

ここに集宴する若き貴族たちは、黄葉の美しさがたちまちにしてうつろい、散り果ててしまうものと知っている。はかなきものは美しい。美しきものは、はかないと言い変えても良いかも知れない。それ故に、とどめえぬ美しきものへの愛着はつる。これが、散らまく惜し、などのことばの出で来るゆえんであろう。彼らは、せつなに對する感

覚を鋭くとぎすます。そして次の歌のように、清流に浮かび流れて行く黄葉にまで想像を走らせるのである。
あしひきの山の黄葉今夜もか浮かびゆくらむ山川の瀬に(8・一五八七)

右一首、大伴書持

日常生活の枠外にあると知りながら、黄葉の美しさを詠むというルールに従って、彼等は己の精神を黄葉のさまざまに没入させるのである。

白露の置かまく惜しみ秋萩を折りのみ折りて置きや枯さむ(10・二〇九九)

奥山に住むとふ鹿の初夜よさらず妻問ふ萩の散らまく惜しも(10・二〇九八)

先にあげた巻十の例も、今あげた、右の二首も、巻八の橘家の集宴での詠の世界とは甚しい径庭を持つわけではない。むしろ、非常に近い関係を持つと考えて良い。

ちなみに、

散る、の語に、散りのまがひ・散らふ を数えて集中一九四語であり、当該の巻十では六七語であり、巻八は、四一語、梅花三二首中の十一語と共に、巻八、十に偏在する。これは、折る、手折る、かざす等とも結びついて、あるひとつのものの見方、とらえ方の態度を示すものに外ならない。なお、散らまく惜し、も右と同様に考えられるが、このように熟して使用する場合は、巻十では十四例、過ぎまく惜しは一例。巻八は七例、巻五は梅花の歌中の二例である。

なお、黄葉の美しく変色して行くさまは、「もみつ」「色づく」の両方で表現される。この点に関して、木下玉枝氏は、色づくの表現の方法が、聖武帝、大伴家持、三原王、厚見王、大伴坂上郎女等の人々に偏りを見せ、天平貴族文人の好みを支配している事実から、集中二十八例中十九例が、巻十に存在することは、巻十の作者たちと右の貴族たちとが同質性を持つと考えておられるようであることも、参考としてあげておきたい。

次に折る、手折る について、ふれておきたい。

梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし(5・八三二)

梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり(5・八三六)

折る、は集中三十九語、巻五では五語、巻八では、四語、巻十では六語であり、巻十七以後四巻では十一語でその他は省略にしたがうが、小数の例外(三例)を除けば、梅の花、山吹、黄葉、萩等の風流の花を折る行為、遊びの行

為であると考えてよい。

手折る、もほほ同じ傾向を示す。すなわち、集中三六語、巻五に二語、巻八に十語、巻十に七語と巻十七以後に七語と目立つが、少数の例外を除けば、梅、青柳、花橘、なでしこ、女郎花、秋萩等と季節感のはっきりと表れた、風流の花や木を手折るという形でのみ存在するのである。

わが屋前の瞿麦の花盛りなり手折りて一目見せむ児もがも(8・一四九六 大伴家持)

射目立てて跡見の岳辺の瞿麦の花総手折りわれは行きなむ奈良人の為(8・一五四九 紀朝臣鹿人)

故郷の初黄葉を手折り持ち今日そわが来し見ぬ人のため(10・二二一六)

春日野の藤は散りにて何をかも御狩の人の折りてかざさむ(10・一九七四)

沙額田の野辺の秋萩時なれば今盛りなり折りてかざさむ(10・二二〇六)

ここでも、作者、年代のはっきりした歌も作者未詳の巻十の歌も、ほとんどそのへだたりを見せていない。

次は、かづら、かざし、かざす等にふれてみたい。ちなみに、続日本紀天平十九年五月五日に、左のような記事があつて、さまざまのことを思わせる。

天皇御_ニ南苑_ニ、観_ニ騎射走馬_ニ、是日太上天皇(元正)詔曰、昔者、五日之節、常用_ニ菖蒲_ニ、為_レ纏、此来已停_ニ此事_ニ、從_レ今而後、非_ニ菖蒲纏者_ニ、勿_レ入_ニ宮中_ニ。

「あやめの纏にあらざれば、宮中に入るなかれ」とは、政務を離れ年老いた女帝の後向きの、回顧の情がはなはだしい発言としても、この時代の宮中の風流ぶりのはっきりと伺える記事である。

かづらの語は集中二四語。うち巻五に三語、巻八に二語、巻十に四語、巻十七、十八、十九の三巻に十三語(うち家持十一語)巻三、巻十二に各一語である。

太上天皇の詔のうち「昔五日の節には常にあやめを用いて纏となせり、此のごろすでに此の事を停む」とあるが、今あげたかづらの語のうち「あやめのかづら」は七語であり、この語は巻三、四二三の山前王(或曰人麻呂)、の歌と巻十の年代未詳の歌(但し、天平二十年三月の福曆の歌と重複 10・一九五五―18・四〇三五)を除くと、天平二十年以後の歌になる。福曆は右の歌を古歌として誦詠しているので巻十の年代を知ることには直接結びつかないが、かづらが福

磨、家持等の万葉最末期の歌人たちの風流と深く結びついて来ることは興味深い問題である。

霍公鳥厭あやぶふ時無し菖蒲あやぶ纏むすにせむ日此ゆ鳴き渡れ(10・一九五五)(18・四〇三五)

梅の花咲きたる園の青柳を纏むすにしつつ遊び暮さな(5・八二五)

をとめらの かざしのために みやびをの纏むすのためと 敷き坐せる 国のはたてに 咲きにける 桜の花の に
ほひはもあなに(8・一四一九)

ももしきの大宮人の纏むすける垂柳しだりは見れど飽かぬかも(10・一八五二)

かざすは集中二七語、卷五は七語、卷八は七語、卷十は五語、卷十七—二十は十語(うち八語、家持)その他は省略するが、ほぼ、かづらの語と傾向を等しくしている。

名詞としてのかざしは集中八語と非常に少ないが、かづら、かざすと一体のもので、あげておく。卷五は一語 卷八は二語、卷十は一語、その他四語である。

梅の花折るかざし、つつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ(5・八四三)

梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり(6・八二〇)

黄葉を散らす時雨に濡れて来て君が黄葉をかざし、つるかも(8・一五八三)

春されば霞隠りて見えざりし秋萩咲きぬ折りてかざさむ(10・二一〇五)

黄葉のにはひは繁し然れども妻梨注(4)の木を手折るかざさむ(10・二二八八)

森脇一夫先生に次のようなご発言がある。

「紅や紫の紐に、あやめの花や花橘、またつぶらな黄金色の橘の実を貫き通して身を装うことは、天平の若き貴族たちの誇らしき「みやび」であったに違いないが、それを美しい詩語に託することが、より究局の「みやび」でなければならなかった。」

かづら、かざす、かざし等のことばに託された歌の世界は右の文章によってほぼ尽されていると言って良い。そしてまた卷十のその歌もまた、そこに内包されて、はみ出すことはないのである。

ことばが自然に意味を与える。ことばが行為をえらばせる。黄葉を色づく、とらえ、花は散るととらえ、黄葉もまた散るととらえる。ことばが自然に対する眼を開かせ、定着させる。花をかづらき、花をかざし、黄葉をかざし、彼らは風流のあそびに参加する。そしてそれも定着して行く。ひとつの感受性の定着。ひとつの文化の定着と言ひ変えても良い。巻の五も巻の八も巻の十も、そういう感受性の幅の中の存在であって大きくふみ外すことはない。

一章では、梅花の歌三十二首を比較の基準として、散る。散らまく惜し、折る、手折る、かづら、かざし、かざす等について触れた。ここでは、惜し、惜しむ、恋し、恋ふ、恋、等の本来相聞の心情を表現する語が、男女相聞の世界をはなれて、風流的あそびの世界に参加するさまを見たい。もちろん、梅花三十二首を基とすることは、前と同じである。

惜しの場合、散らまく惜しのところで触れたところと重複するところがあるので、例の多くは割愛するが、惜し惜しみ等は集中九二語、うち、別れを惜しむ、命、名等を惜しむなどは五二例、風流のたとえば、

常はさね思はぬものをこの月の過ぎ隠れまく惜しき夕よかも(7・一〇六九)
 などの例は四二語ということになる。

恋の場合は次の表のごとくになる。

恋(恋、恋ふ、恋し、かた恋、妻恋 等)

分類 II	分類 I	全用例数	巻
0	1	7	1
0	2	29	2
0	8	19	3
0	0	88	4
2	2	7	5
0	1	10	6
0	8	25	7
7	4	31	8
2	1	21	9
28	10	106	10
0	0	161	11
0	0	131	12
0	0	41	13
0	0	20	14
1	0	41	15
0	0	8	16
0	4	35	17
1	3	13	18
0	1	13	19
0	1	19	20

恋（名詞・動詞・形容詞）の計八二五語

うち分類Ⅰ の計 四六語

うち分類Ⅱ の計 四一語

恋、恋ふ、恋し等は万葉集中、もつとも重要な、しかも基本的な語であることは論をまたない。その上、各巻にもれなく分布し、その数量もすこぶる多い。そしてまた、圧倒的に相聞の情熱を示す語であることもまたいうまでもない。しかしながら、八百数十の例のうちの約一割強の八十数例が、その直接的な男女の間の感情をうたわないのである。その八十数例を仮に分類したのが右の表でありそれは次の基準によるのである。

分類Ⅰ・Ⅱの例はともに、恋ふ、恋しの対象が人間ではなく、いわゆる花鳥風月であるが、Ⅰの場合は歌を詠む人の情熱が直接に対象に向うものであり、Ⅱの場合は、七夕の歌、鹿の妻恋の歌のごとく、いわば間接的に対象に向うものである。

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋ほしき春來たるらし（5・八三四）

あしひきの山桜花日並べて斯く咲きたらばいと恋ひめやも（8・一四二五 赤人）

何しかもここだく恋ふる霍公鳥鳴く声聞けば恋こそまされ（8・一四七五 大伴坂上郎女）

秋萩に恋ひ尽さじと思へどもしゑや惜らしまたも逢はめやも（10・二二二〇）（以上分類Ⅰ）

わが背子にうら恋ひ居れば天の河夜船漕ぐなり楫の音聞ゆ（10・二〇二五 七夕）

妻恋ひに鹿鳴く山辺の秋萩は露霜寒み盛り過ぎ行く（10・一六〇〇）（以上分類Ⅱ）

参考にごくふつうの相聞歌をあげれば次のようである。

恋ひするに死するものにあらませばわが身は千遍死にかへらまし（11・二三九〇）

巻十における分類Ⅱの恋が、他の巻に比して多いのは、秋雑歌の七夕歌がその恋の大部分をしめているからである。七夕歌は集中、一三三、一三四、一三二、首等と数えられるが、巻十には九八首存在している。これは集中の七夕歌の七割を越え、巻十全体に対する比率では十八%に及ぶのである。したがって、巻十における七夕歌の量の多さは、もう少し注目されるべきであろう。

ここでは次の二点に注目しておきたい。

第一点は巻十の七夕歌が非常に庶民的になり、日本的なものになってきている面を持つているとしても全体の大きなわく組の中では、漢文的な世界であると言えることである。たとえば、小島憲之氏は次のように言われる。^{注⑥}

「万葉集の七夕詩とは差があるにも拘わらず、なお全般より見れば、七夕詩に得た点もあり、この詩想を歌にこなし、現実在即して詠むために、万葉歌の努力が必要であった。」

七夕歌の中国文学の影響について、小島氏、中西氏の深く秀れた研究があり、詩想から用字に至るまで深くかかわっていることは両氏の指摘するところである。

第二点は七夕歌は宴に関係して詠まれた可能性があるのでなかろうかと考えられる面が存在することである。

作者の判明している七夕歌では、憶良と家持がもっとも多く、憶良十二首、家持十三首である。憶良の場合は巻八の一五一八一―一五二九の一連十二首であり、最初の一五一八には、「右、養老八年七月七日、応_レ令。」のと左注があり、一五一九には「右、神龜元年七月七日夜、左大臣宅。」の左注、一五二〇―一五二二には「右、天平元年七月七日夜、憶良仰_レ觀天河。」一云帥家作」の左注、一五二三―一五二六には「右、天平二年七月八日夜、帥家集會」の左注がある。最後の一連、一五二七―一五二九には題詞、左注、共にないが、これは天平四年七月に「在京時の歌が「応_レ令」「左大臣家」のものであり、九州の歌が「帥家作」であると同様に、何らかの宮廷人の集宴において詠まれた歌だと考えるのが隱やかであろう」とする中西進氏のお考えが正しいと思われる。したがって、憶良の七夕の歌は全て宴の場の作であるといえる。

家持の場合は、いさゝか様子が異なる。

17・三九〇の歌は「十年七月七日之夜、独仰_三天漢_二聊述_レ懷」の題詞を持つ。20・四三〇六一―四三一三の八首一連もまた「右、大伴宿祢家持独仰_三天漢_二作_レ之」の左注を持つ。独とある以上、宴の歌でないことは明らかであるが、たとえば前者の場合、伊藤博氏がご指摘の通り、^{注⑦}続紀天平十年七月七日の宮中での壮大な肆宴は、未だ五位に至らぬゆえに文人としての誇を持ちながらそれに参加できない家持をして「独」と感じさせないではおかぬものであったし、後者の場合も、家持の性向もあるかも知れないが、独とわざわざことわるのは、七夕の歌の場合は、宴の場での作が

普通であったと考えられはしないであろうか。したがって、この場合、両方ともに宴への指向を持つものとして考えたい。ちなみに、卷十の七夕の歌の場合、次のような歌は、七夕と題されていなければ、果して七夕と断定できるであろうか。

あからひくしきたへの子を数見れば人妻ゆゑに吾恋ひぬべし(10・一九九九 人麻呂歌集)

わが待ちし秋萩さきぬ今だにもほひに行かな遠方人に(10・二〇一四 人麻呂歌集)

月日えりてあひてしあれば別れむの惜しかる君は明日さへもがも(10・二〇六六)

恋ふる日は日長きものを今夜だにともしむべしやあふべきものを(10・二〇七九)

すなわち、これらは七夕の宴の中の一連であったと考えて、はじめて解釈のつく問題であるし、これらの歌が相聞の部に入らずに、雑歌の部に入っていることの説明もまた同様の解釈をとって可能であろう。したがって、憶良、家持、卷十、七夕歌と考察してみても、少なくとも七夕歌と宴との関連性は多分に存在すると考えて良いかと思われる。恋の語は、男女の間の切ない思いを表現する語であるといえる。それが恋の本来の意味であり、あり方であろう。そしてまた万葉集中における恋の大部分もまた同様のあり方をする。しかし、表にあるごとく、恋の語の一割強が、その枠組から外れて使われる。そしてそれが卷八と卷十とに特に偏在するのである。

その恋の対象は自然の風物であり、物語詩の主人公であったりする。少なくとも実用性のあるものではない。もっとも宴の場であるとしたら、宴の場での実用性ではあろうけれども、それは、あそびにかかわる実用性であって、男女の思いにかかわらない恋は非実用性を本質とするであろう。少なくとも、自己の内的な衝動にかかわることのより少ない、客観的、理性的な風雅なものであるといえよう。そしてまたそれは、ナマのままの生活感情とある距離を保った精神活動や美意識にかかわるものと考えて良いであろう。

卷八と卷十とを新万葉と名づけたのは、中西進氏である。^{注⑩}新しい文学の登場には常に表現技術の革新や新しい素材の発見がある。それは、多く語られて来たように、みずみずしい豊かな季節感の歌であり、漢詩的素材の使用や漢語・漢字などの用字の巧みな使用法などであろう。

それと共に、新文学はまた常に新しい文学的態度の確立に裏づけられて登場するのである。さもなければ、新文学

の質的充実は保証されないのではなからうか。

花は咲くことよってのみ美しいのではなくて散ることよって一層美しいという一つの視点、黄葉は色づくことよってのみ美しいのではなく散ることよってさらに美しいとする視点、それを持つ故に彼らは、花を手折り、黄葉を手折り、花をかざし、黄葉をかざすのである。そしてまた花を恋い、鳥を恋うのである。

それらのことが、日常生活の枠外にあると自覚しながら、しかも彼らの精神は、それにとらえられているといつて良い。

これは、やはり「あそび」というべきなのであらう。そして、この「あそび」として、とらえることのできる態度が、新しい文学的態度と言つて良いものである。

卷十の作者たちが、その態度を最初に保持したと断定することはもちろんできない。が、少なくとも、この「遊び」の態度は、この巻を規程する大きな特色のひとつとして存在しているのである。

四

天平という時代は、良き時代であつたと意識されたりしく思われる。天平感宝、天平勝宝、天平宝字、天平神護と、天平を冠されてつらなる年号がそれを証してはいはしないであらうか。

天平の主人公聖武天皇は七〇一年に生まれた。大宝律令は七〇二年に成立した。そして七一〇年平城京に都は定まるのである。地方から中央に至るまでの膨大な富と労働を民衆から奪い都に集中することを可能にしたのは、この律令の力であつたし、官人組織もまたそのために整備されたのである。文武、元明、元正の安定した律令体制の下に生産力が上昇し国庫の富が充実した時点で、二十四歳、首皇太子は期待された天皇として、古代王権の専制者としての権力を持つべく、奈良朝三代目の天皇として即位したのである。

このことをぬきにして天平の「あそび」の精神を語ることはできない。

皇太子時代の彼の教育係は当代一流の学者、文化人たちであつたし、帰化した人々、唐からの帰朝者もいた。唐留学から帰つて来た、僧玄昉、吉備真備などもやがて彼のまわりを取りかこむようになる。輝しき盛唐の長安の華麗さ

彼の心をとらえて離さなかつたであろう。彼は二回もの遣唐使を派遣する。そういう彼の時代の零厠気を見のがすことはできないし、遊獵、遊覽、肆宴と、いわばあそび好きの、若い天皇の行動は、風流侍従、遊士、風流士の貴公子たちに、より一そう、その傾向を深めさせることになつたであろう。

神龜元年（七二四）は聖武天皇の即位の年である。この年の十一月、五位以上の者及び庶人の富者に、瓦葺、白壁、丹塗の柱の建築を許可する。これは、都への定着が決定的になつたことと、支配者層である貴族及び豪族たちの富の蓄積が相当に進んだことを意味するのであろう。

「屋戸の文学」と称して良い、一群の文学が巻八と巻十に特に偏在し顕著にその姿を表すのは、この都への定着の問題をぬきにしては語れない。「空間的に奪はれた自然を無理に時間的に恢復したやうなもの」として「みやこ」の持つ極端に鋭敏な季節感を平安朝の文学に見たのは、高木市之助先生であるが、その先驅はこの両巻には顕在している。これに関連して言えば、巻十の庭園的性格と大和中心性は、地名の分布によつても確められるし、あるいは集中八十余の「みやこ」という語例のうち、年代のわかる七七例中六六例が奈良時代のものであるという森淳司氏のご指摘も実に興味深いものである。これらの諸点についてはいづれ別の機会をえて論じたい。

巻十の性格は、五味智英氏の「風流をたのしむ傾向の歌、繊細な感じの歌、類想、同型の表現、中国文化の影響などが相当量見出される点からして、当代知識階級の一般的水準の作が主となつてゐると思われる」といふご指摘や、木下玉枝氏の「巻十の歌の中で、原資料の年代推定の手がかりを与えるものとしては、「奈良朝以前のもの」「神龜、養老から天平初期にかけてのもの」「天平初期以後天平十六年以前のもの」などがあり、数量的には「天平期以後のもの」が圧倒的に多い。しかも、それらの歌の中には、天平期の貴族、文人の世界と深く、係わりをもつていたものがあつたと考えられるのである。」といふご指摘に現在はずきと思われる。

小論は、これにつけ加えるべき新しいものはない。ただ、巻十の「みやび」の範圍の広がりや深さを、「あそび」といふ文学的態度から見ようと試みたのみである。

（本稿は、昭和四十八年度の島根大学の上代文学会大会において一部発表したものである。なお、森淳司氏には未発表原稿をお見せいただいたり、その他のご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。）

注(1) ホモ・ルーデンスの邦訳は、高橋英夫訳（中央公論）があるが（この部分の「あそび」の定義は P 32）ここでは「遊びと人間」カイヨワ著、清水幾太郎、霧生和夫訳（岩波）P 4 から採用した。

- (2) 「万葉集と中国文学との交流」小島憲之 万葉集大成7
「万葉集における四季の景物固定について」森淳司 語文4輯（日大）
「万葉集作者未詳歌と季節感」遠藤 宏 論集上代文学 第二集
「花の流れ」川口常孝 万葉歌人の美学と構造 所収
「万葉集卷十論」木下玉枝 お茶の水女子大学人文科学紀要 一九七三年三月
木下氏前掲論文
- (3) 「天平のみやび」語文21輯
- (5) 「七夕をめぐる詩と歌」小島憲之 上代日本文学と中国文学 中 所収
「七夕歌群の形成」中西 進 万葉集の比較文学的研究 所収
「七夕説話伝承考」大久間喜一郎 明治大学教養論集 25号
- (6) 前掲論文（注5）
- (7) 「七夕の歌」山上憶良所収
- (8) 「譬喻歌の構造」国語国文33巻12号
- (9) 「新万葉の出発——巻八の形成——」成城文芸46号
- (10) 「万葉歌小考——庭園をめぐる——」戸谷高明 国語と国文学 昭44年10月号
「天平の歌語——「やど」をめぐる——」森淳司 未発表原稿
「いへとやど——万葉を中心に——」後藤和彦 薩摩路11号
「屋戸の花」中西進 論集上代文学 第三冊
- (11) 日本文学の環境 P 114
- (12) 「東歌」伊藤 博 万葉集研究 第一集
- (13) 「万葉文学における大和」森 淳司 日本大学文学部紀要第7号
- (14) 日本古典文学大系 万葉集 III 解説 (15) 木下氏前掲論文